

# ベルクソン哲学入門

石井 敏夫

以下に掲載させていただくのは、平成11年12月にラジオ短波「三色旗—慶應義塾の時間」で五回に分けて行った放送講義です。講義の目的は上記のタイトルが示す通りですが、講義内容は各回ごとに独立したものとなっています。原稿には放送という枠を外れることで不要になったフレーズや言い回しも散見されるかもしれませんが、編集責任者にご無理をお願いして、ほぼ放送時のままの形で再現させていただくことにしました。放送された内容および日時の一覧は以下の通りです。

第1回 真理探求について	12月 3日 (金曜) 22:00～22:30
第2回 自由な行為とはどんな行為のことか	12月10日 (金曜) 22:00～22:30
第3回 性格について	12月17日 (金曜) 22:00～22:30
第4回 生物の死をめぐって	12月24日 (金曜) 22:00～22:30
第5回 内なる他者	12月31日 (金曜) 22:00～22:30

## 第1回

### 真理探求について

今晚は、皆さんお元気でお過ごしでしょうか。今日から五回にわたって、ベルクソン哲学入門と題してお話しさせていただきます。よろしくおつきあい下さい。第一回目の今日は、ベルクソンという名前を初めて聞く方々のために、ベルクソンの人と生涯について、ごく簡単にはありますが、紹介しておきたいと思います。

アンリ・ベルクソンは1859年にパリに生まれました。父親はポーランド系ユダヤ人の音楽家で、母親はイギリス人です。ベルクソンはどんな子供時代を過ごしたのでしょうか。また、どんな学生時代を過ごしたのでしょうか。一人の哲学者の幼年時代や学生時代がどんなふうに通じられたかということは、一般的にいつて、とても興味を引く問題です。しかし、ことベルクソンに関していいますと、とても成績優秀な子供であり学生であった、という以外に、そしてまたとりわけ数学に秀でていた、という以外に、とりたてて述べることはないようです。

フランスの多くの哲学者と同じく、ベルクソンも、学校を卒業して社会に出ると、

教師としてのキャリアを積むために、いくつかの高等中学校（リセ）を歴任します。そして、この時代に処女作を含む二つの著作が出版されます。処女作のほうは『意識の直接与件に関する試論』というタイトルのもので、1889年に公刊されています。日本では『時間と自由』というタイトルのほうがよく知られているかもしれませんが、この本の思想内容に関連する話題としては、次回、ベルクソンが自由ということについてどんな考えをもっていたかを、お話する予定でいます。高等中学校を歴任していた時代に出版された、彼の二つ目の著作は、『物質と記憶』というタイトルのもので、1896年に刊行されます。こちらは研究者たちのあいだでも難解を極める本として有名です。この本の要をなしているのは失語症の研究ですが、この本ではその失語症研究を軸に、様々な哲学的問題が考察されています。例えば、精神と身体の関係の問題、あるいは精神とは何か、物質とは何かという問題、さらには精神や物質が存在するということはそもそもどのようにして証明されるのか、という問題などです。

二つ目の著作である『物質と記憶』が発表されたのは、ベルクソンが37才のときですが、この頃がすでに、彼の哲学者としての生涯の折り返し地点であったのかもしれませんが、彼がこののち発表するもので、その主著と呼べるものはあと二つしかありません。1907年の『創造的進化』と1932年の『道徳と宗教の二源泉』です。『創造的進化』は生命進化論を彼の哲学的立場からとらえなおして、独自の宇宙進化論を提唱するものです。『道徳と宗教の二源泉』のほうは、道徳にも宗教にもそれぞれ二つのかなり性質を異にする源泉、源がある、ということを描き出すものです。『創造的進化』に関連する話題としては、第四回目に、生物の死をめぐる、『道徳と宗教の二源泉』に関連する話題としては、最終回に、内なる他者と題してお話する予定です。

ベルクソンの没年は『道徳と宗教の二源泉』が出てから9年後の1941年ですから、およそ80年の生涯で、名のよく知れたもので、その主著と呼べるようなものは、四つしか世に送り出さなかったわけです。これは寡作というべきでしょうか。探求された領域の広大さと、取り上げられた問題の多様さを考えると、物理的に見れば確かに寡作ですが、決して寡作という印象を与えないのも事実です。

折り返し地点を過ぎてからのおよそ30年間、すなわち30代の終わりから70才までの間についていえば、コレージュ・ド・フランスの教授職を長年勤めたり、第一次大戦中に文化使節としてアメリカに派遣されたり、物理学者のアインシュタインと時間の問題について論争したり、ノーベル文学賞を受賞したり、あるいはまたリューマチに悩まされたりと、年譜に記載されている事実は色々です。いずれにせよ、この間、世に名が知られたスター的な存在の常として、極めて忙しい生活を余儀なくされたよう

です。マイペースで思索に集中できた無名時代のことを時折思い出しながら、時間が足りないことをぼやく晩年のベルクソンの心情は、少しも有名ではない私にも十分想像がつかます。

ベルクソンの人と生涯についての紹介はこれくらいにしておきます。

さて、今日はオープニングとしての意味合いもあるわけですから、ベルクソンの哲学のうちで最も基本的な部分、すなわち彼の哲学観についてお話しておきたいとします。一般には哲学は真理を探求する営みとされますから、彼の哲学観に耳を傾けることは、彼の真理観に耳を傾けることでもあります。彼は真理というものについてのどのような考えをもっていたのでしょうか。

例えば、いま皆さんの頭上に、虹の様々な色合い、紫や青、緑や黄や赤の色合いが見えているとします。その虹を見ている皆さんに向かって、ベルクソンはこんなことをいいます。鮮やかに浮かんでいる虹の様々な色合いは一つの現実である。この現実、すなわち虹の様々な色合いについて哲学するには、大まかにいって二つのやり方がある。一つは、虹のどの色合いも色であり、色であるという点では共通している。従って、それらの色合いについて哲学する間違いのない最も確実なやり方は、それらはすべて色という観念でくることができると述べることである。紫は一つの色である、青も一つの色である、緑も黄も赤もそれぞれ一つの色である、どれもみな色である、色という点で共通している、色といっておけば間違いない。面白いことに、ベルクソンは、このようなやり方をする哲学を、抽象で満足する哲学にすぎないといっています。これを聞いて皆さんはどう思われるでしょうか。そもそも哲学というのは抽象的で、抽象的であればあるほど哲学的で、つまりは味もそっけもないほど有り難いものだ、という通念に毒されてしまっている人には、これは意外に聞こえるかもしれません。ベルクソンによれば、虹の様々な色合いについて哲学するもう一つのやり方は次のようなものです。それは、それらの様々な色合いの源にまで溯ってゆくやり方、それらの様々な色合いを地上近くで生み出している白色光にまで、空高く溯ってゆくやり方です。もちろん、白色光にまで溯るといっても、そう簡単に事は運びませんし、予想外の障害が立ちをだかつて、仕事が頓挫してしまうこともあります。ですが、いまは様々な工夫を重ねて、どうにかこうにか、一筋の白色光にまで達することができたと仮定してみます。何が起こるのでしょうか。不思議なことに、紫や青や緑といった個々の色合いのうちに、初めはそれらに認めることのできなかつたものが、ほのかに姿を現してくる、とベルクソンはいいます。それらの色合いは、それぞれの仕方、

同じ一つの白色光の雰囲気を伝えているように見えてくる。それらの色合いは、どれも同じ一つの白色光の雰囲気に含まれているように見えてくる、というのです。このようなことがもし本当にあるとすれば、それは、虹の様々な色合いが、それ自体は何色でもない色一般という観念でくられるのとはまったく別の事柄でしょう。このような真理探求は、現実を抽象し、その中身を空虚にすることで得られる真理を、真理と称する哲学、とは異なります。そうではなくて、これは、現実の豊かさを決して手放さず、その豊かの源にまで溯ってゆくことで得られるような真理を目指す哲学です。ベルグソンが目指しているのはこのような哲学らしいのです。それが具体的にどんな哲学かということは、これだけの話ではまだ漠然としているかもしれませんが、少なくとも、それが抽象的であることに決して満足しないような哲学であることは、解っていただけたのではないのでしょうか。

ところで、このようなベルグソンの哲学観および真理観は、問題となる現実がもっと複雑なものであるとき、その素晴らしさとその困難さがいっそう鮮明に現れてきます。例えば、人間という現実を考えてみましょう。人間について抽象的に哲学するにはどうすればよいのでしょうか。それなら簡単です。多様な個性をもった個々の人間から、それらの人間の個性をすべて取り除いて、どんな人間にも見られる共通性質をはっきり見てとることです。いわく、人間は色々な歩き方をするものだが、ともかくも人間は二本脚で歩く。人間は色々な集団をつくって良いことも悪いこともするものだけれど、ともかくも人間は政治的動物である。人間のしゃべり方や書き方は色々だけれども、ともかくも人間はしゃべったり書いたりする。人間の笑い方には品のあるもの、ないもの、あるけれど、ともかくも人間は笑う。人間の文化というやつは多種彩々だが、ともかくも人間は文化をつくる。こうした類いの真理は際限なく、造作なく、得られそうですし、一度得られてしまえば、いつでも人間を人間以外のものから区別するのに役立ちます。しかし、いま試みに、人間に関するこれらの定義のうちの「人間」という言葉のかわりに、特定の誰かの名前を、例えば皆さんのよく知っている友人や知人の名前を入れてみましょう。すると、次のようになります。Aは二本脚で歩く。Aは政治的動物である。Aはしゃべったり書いたりする。Aは笑う。Aは文化をつくる。このようなことを延々と聞かされたら皆さんはどう思われるのでしょうか。確かにそれでAさんが人間であるということは分かるでしょうが、そんなことなら初めから分かっているといいたくなるでしょう。では、Aさんについて、Aという人のAらしいところについて、つまりAさんをAさんたらしめているAさんのA的などところについて何が分かったのでしょうか。何も分かりません。また、AさんとAさん以外の

様々な人たちの関係、AさんがBさんやCさんやDさんたちと結んでいる関係もさっぱり分かりません。色合いも様々、大きさも堅さも様々な岩石について、それらはみな岩石である、と述べても、それらの岩石が地球の歴史を通じてどんなきずなどで結ばれているのかはさっぱり分からないのと同様です。

では、人間について抽象的ではないやり方で哲学するにはどうすればよいでしょうか。目につく限りの人間のすべての個性、人間という人間のあらゆる個性を寄せ集めて、混ぜ合わせればよいでしょうか。ところが、誰でも知っていることですが、色々な色の絵の具を混ぜ合わせると、色は混濁し、どす黒くなり、鮮やかな色彩はみな消え去ってしまいます。つまり、どの色も見えなくなってしまいます。これでは色という一般観念を得るのとそう大差はないでしょう。ですから、話はそう単純ではないのです。では、どうすればよいのか。こういう問題については実は一般論というもの成り立ちません。知りたいと思う対象ごとに方法を考え直さなければならないのです。しかし、そのようにいってしまうと、それこそ皆さんをひどい一般論のうちに放置しかねないことになってしまいますので、ベルグソンの考え方の方向性だけははっきりさせておきたいと思います。ここであえて、ベルグソンが目指す哲学の仕方を、いま挙げた絵の具の比喩を使っていってみれば、次のようになるとと思います。いま皆さんに見えているすべての絵の具の色合いが、見えたままであるようにしておきながら、それらの色合いに共通の、不可視の源にまで、いわば視線を透視させる、といったやり方、そして、すべての色合いに共通の、目に見えない源を透視しながら、そこから様々な色合いが分かたれてくる様を、心の視線で迎ってくる、といったやり方です。

この世界には様々な人がいます。この世界という舞台には人間の多様な個性が散乱しているといってもいいかもしれません。鮮やかな個性もあれば、目立たない個性もあるでしょう。個性が輝き出るときのその光の強さもまちまちでしょう。個性の源にあるのは何でしょうか。それは世界を生きる力といってもいいかもしれません。その意味では個性は世界を生きる力の現れとも考えられます。では、それは一体どんな力なのでしょう。それを知るには、おそらくその力が鳴りを潜めているときではなくて、それがこの世界に最も強く輝き出る瞬間に、それをとらえてみるのでなければなりません。それはどんな瞬間でしょうか。それは皆さんによって自由な行為がなされる瞬間です。今回は自由な行為について考えてみることにします。

## 第2回

## 自由な行為とはどんな行為のことか

今日は自由な行為について考えてみたいと思います。

自由な行為とはどのような行為のことでしょうか。どのような行為をするとき私たちは自由であるといえるのでしょうか。こんなふうに質問されたら、皆さんだったらどう答えるのでしょうか。簡単に答えが出るのでしょうか。なかなか答えが出ないのでしょうか。もしすぐに自分の答えが見つからないようでしたら、皆さんがよくご存じの哲学者や倫理学者や思想家の名前を思い浮かべてみて下さい。そして、彼らだったらどんな答えを出すかを想像してみてください。よろしいでしょうか。まあ、ここまでではちよつとした頭の体操だと思って下さい。

では、早速、ベルクソンの考えに耳を傾けてみたいと思います。まず、自由行為についてのベルクソンの考えは、アウグスティヌスが時間についてもっていた考えと、とても似ているところがあります。ほとんどそっくりとっていいかもしれません。アウグスティヌスは時間についてこんな考えを述べています。時間が何であるかを私はよく知っている。確かによく知っているのだけれども、時間とは何であるかを言葉で説明しようとする、たちまちそれが何であるかが解らなくなってしまう。時間とは何かをよく知っている、なのにそれについて説明しようとする、それが何であるかが説明できなくなってしまう。そうアウグスティヌスというのはです。ベルクソンも自由な行為についてこれとほぼ同じ考え、ほぼ同型の考えを抱いているようです。すなわち、人は誰でも自分が自由に行為しているときには、自由とは何かを明瞭に知っている。疑いようもなく明白に知っている。なのに、自由な行為とはどんな行為かを説明しようとする、たちまち自由な行為とは何であるかが解らなくなってしまう。そうベルクソンはいうのです。考えないうちはよく解っているのに、考え始めるとよく解らなくなってしまう、というわけです。このような考えが、自由行為に関するベルクソンの考えのいわば枕の部分になります。ですから、これから見るベルクソンの自由についての考えは、皆さんが考えないでいるうちはもっているかもしれない自由についての理解、よく考えることの手前で、あるいは向こう側で、皆さんが自由についてもっているかもしれない理解、そのような理解に訴えるものだといえるかもしれません。

では、自由な行為とは具体的にはどんな行為のことなのでしょうか。私たちはどのように行為しているとき、自由であるのでしょうか。この問いに対するベルクソンの答えは、それについてよく考えないうちは、よく解るのに、それについてよく考え始

めると、よく解らなくなってしまう、といった類いのものかもしれません。その点に注意して彼の考えを聞いてみましょう。ベルクソンの答えは一風変わっています。ある人が行為するときのその行為が自由であるといえるのは、その行為が、その人の、その人らしい行為になっているときだ、というのがその答えです。ある人がその人らしい、とてもその人らしい行為をするとき、その人はとても自由なのだ、というわけです。これはいったいどういう答えなのでしょう。一見明瞭な答えにも見えますが、とても漠然としているようにも感じられます。ベルクソンが、ある人物のその人らしい行為と考えるのは、どのような行為なのか。この点をはっきりさせるために、ここで回り道をして、ふつう私たちが「らしさ」と呼んでいるものと行為との関係について少し考えておきたいと思います。

いまあなたの友人があなたの眼前で横断歩道を渡ったとします。その場合、あなたはあなたの友人のその行為に、彼「らしさ」を感じずるでしょうか。極端にせかせか歩くとか、威風堂々とゆっくり大股で歩くとか、彼に何か著しく目立つ癖でもない限り、そこに彼「らしさ」を感じずることはないでしょう。横断歩道は誰が渡っても似たりよったりでしょうし、ちょっと変わった渡り方をするというくらいなら、何もそこにその人「らしさ」を見るまでもない、と考えるのがふつうではないでしょうか。その証拠に、例えば、あなたがあなたの友人のことを誰かに紹介するときに、彼の彼「らしさ」を知ってもらうために、彼の横断歩道の渡り方を話題にするということは、まず考えられないでしょう。彼自身もそんなことが自分の自分「らしさ」として話題になるなどとは、つゆほども想像しないでしょう。つまり、横断歩道を渡るというような行為については、誰それの誰それ「らしさ」ということは話題にしないのがふつうなのです。かりに話題になるとしても、それはちょっとした癖とか、無意識的な習慣の問題としてです。

別の例を挙げましょう。今度はあなたの友人が、あなたとの待ち合わせ場所に、約束の時間に大変遅れてやってきたとします。彼は謝り、遅れた理由を述べ、理由によってはもう一度謝り、場合によっては何か埋め合わせしようとするかもしれません。あるいはしっかり謝った後は、もう何事もなかったかのように、一時間遅れで当初の計画に従って行動し始めるかもしれません。遅刻者の振る舞いにはいくつかのパターンがあると思いますが、いまあなたの友人があなたに平謝りに謝っているとして、あなたはその謝罪に彼の彼「らしさ」を感じとることができるでしょうか。おそらく感じとることができるでしょう。平謝りに謝っているようで、いかに遅刻がやむをえないものであったかを縷々と述べ立てる友人もいるでしょうし、文字通り平身低頭謝る

友人もいるでしょう。ですから、先ほどの横断歩道を渡る例と比べると、遅刻して謝るという行為は、それをする人の「らしさ」が多少関心を引く行為の部類に入るかもしれません。でも、例えば、あなたが仲介役を買って出て、恋人のいないあなたの友人を、異性に紹介するとき、あなたは、遅刻したときの彼の謝る様子を、彼の彼「らしさ」として、話題にするでしょうか。たぶんしないでしょう。

人付き合いの仕方という例はどうでしょうか。これは相当にその人「らしさ」が出るのではないのでしょうか。よい意味でも悪い意味でもこれは話題になります。相手が付き合いやすい人が付き合いにくい人か、ということ、場合によっては死活問題になりかねませんし、それほどではなくても、仕事をいっしょにする必要がある場合などには、相当な関心を引きます。

最後にちょっとした難題にぶつかったときの対処の仕方という例を考えてみます。このような場合には、ある人のその人「らしさ」というものがとてもよく出るのではないのでしょうか。関係者はその「らしさ」を率直に賛嘆したり、あるいははしかめっ面で嘆いたりすることさえするかもしれません。

さて、最初の二つの例、すなわち横断歩道を渡る例や、待ち合わせに遅れて謝る例では、「らしさ」があまり問題にならなかったのに対して、最後の二つの例、人付き合いの仕方の例や、ちょっとした難題にぶつかったときの対処の仕方の例では、比較的「らしさ」が問題になりました。総じて、後のほうの例になればなるほど、「らしさ」が自然に、あるいは必要に迫られて話題になるように思われます。後のほうの例になるほど、ある人のその人「らしさ」が目立ってくるわけです。

話をベルクソンの考えに戻しましょう。ベルクソンは自由な行為をいわば人のその人「らしい」行為と考えていました。では、いま挙げた四つの例のうちの、最後の二つの例で話題になるような「らしい」行為、つまり人付き合いの仕方やちょっとした困難の乗り越え方に見られるような「らしい」行為が、ベルクソンの考える自由な行為なのでしょうか。おそらく皆さんはそうだと考えたくなるでしょう。ところが、ベルクソンの考えはそうではないのです。

どうしてでしょうか。その理由を考える前に、ベルクソンが自由な行為は「らしい」行為であると考えるとき、その「らしさ」とはどういうことなのかを、見極めておきましょう。ベルクソンは、人が自由に行為するときのその行為とは、芸術家が創作活動に打ち込んだ結果として生み出される作品のようなものだと思います。自由に行為する人とその人によって生み出される自由な行為との関係は、芸術家とその作品との関係に似ている、というのです。ここでただちに付言しておきたいのですが、

これは、オートメーション技術とそれによって生産される規格品との関係とは異なります。芸術家は、例えばヴァレリーがいつているように、ときにはアヒルをかえす白鳥であり、ときには白鳥を解すアヒルなのです。白鳥をかえしてしまったアヒルはもちろん驚くので、そこにこそ芸術活動の醍醐味もあろうというものです。これはオートメーション技術によって規格品を生み出す働きには決して起こらない事態でしょう。最近では機械も人間並に色々なことができるそうですから、将来は小説でも書いて何か有名な文学賞でもとってもらいたいものですが、たとえ「2001年宇宙の旅」に出てくるハルのようなコンピューターに賞がとれたとしても、ハルは白鳥をかえすアヒルではないのではないのでしょうか。また、ハルならアヒルをかえす白鳥にだけはならないでしょう。

では、実生活において、私たちは、努力に努力を重ね、苦心に苦心を重ねて作り上げられた芸術作品にも匹敵するような行為をすることがあるのでしょうか。そのような行為があるとすれば、その行為は最もその人「らしい」ものとなっている、というのがベルクソンの考えです。ところが、私たちは実生活ではそうそう白鳥をかえすアヒルにはなれないようです。少なくとも、ベルクソンはそう考えていました。自由な行為は稀だ、とベルクソンはいいます。そんな行為は滅多になされぬし、ひっとしたら人生のうちで一度もなされぬで終わってしまうかもしれない、とさえいつています。これはちょっと厳しすぎる、というか、あまりに稀な自由を問題にしているように見えます。実際そうなのですが、自由な行為というものがあるとすれば、そのような意味合いにおいてでしかない、というのがベルクソンの考えなのです。確かに、ベルクソン自身ものちには、この考えの基本線は守りながらも、自由というものには様々な程度がある、ということを描べるようになります。ですが、ベルクソンが考える純粋な意味での自由は、やはり稀な自由、滅多にない自由、白鳥をかえしてしまうアヒルの自由なのです。白鳥はアヒルに似ていないのではないかと、つまりそのような自由行為は少しもそれを生み出した人に似ていないのではないかと、少しもそれを生み出した人「らしくない」のではないかと、とお考えでしょうか。それは、白鳥を生み出したのはアヒルにすぎない、と考えるからです。白鳥は実は隠れていて鳴りを潜めていただけかもしれないのです。

ということは、こういうことになります。言葉の真の意味での「らしさ」と性格とは何の関係もない可能性がある、ということです。関係ないどころか、性格と言葉の本当の意味での「らしさ」とは相いれない可能性すらある、ということです。性格はむしろその人「らしさ」を隠してしまったり、あるいは奪ってしまうものかもしれない

いのです。確かに、私たちは通常、人の性格をその人「らしさ」と考えています。ベルクソン自身も文脈によってはそのような考えを共有しているところがあるように見えます。ところが、ベルクソンが自由論の文脈で考えている「らしさ」は、独自の、一つきりしかないような「らしさ」のことなのです。それどころか、極端にいえば、あるとき、ある場所で、一回きりの行為のうちに表現されるような「らしさ」、一回きりの行為としてしか成立しないような「らしさ」を考えているのです。本当にそんな「らしさ」はあるのだろうか、と疑問に思われる方も多いでしょう。それに対しては、そのような「らしさ」は、あるものではなくて、全力を尽くすことで生まれるものだ、そして生まれたときに初めて体験されるものだ、とベルクソンならいうでしょう。そして、そこに自由な行為の問題を考える難しさがある、というでしょう。私たちはふだんは全力を尽くさないで済む生活を送っているのかもしれませんが、そして、それは、基本的には性格とそれが身にまとう強固な習慣がものをいう生活を送っている、ということなのかもしれません。次回は人の性格という問題について考えてみます。

### 第3回 性格について

今日は性格について考察します。

あの人はああいう性格だ、この人はこういう性格だ。あの人はああいう性格だから付き合いやすい。この人はこういう性格だから周りの人は困る。私たちはこんな言い草をよく耳にします。また、性格を形容する言葉は実に様々です。例えばこんな具合です。彼は気が弱い、彼女は気難しい、彼はどちらかといえば神経が図太い、彼女は繊細に過ぎるくらいだ、彼には裏表がない、彼女は直截だ、などというような具合です。こういった表現はどれも人の性格を言い当てようとするものです。

ところで、皆さんは、皆さんのよく知らない他人の性格のことが話題にのぼるとき、どんなふう振る舞うでしょうか。もし皆さんが、話題にのぼっている人について、何か特別な関心を抱いていれば、その人が「身勝手だ」と聞かされると、その人がどんなふう「身勝手」なのかをもっと詳しく知りたくなるかもしれません。その人に対して大して興味がない場合や、それなりに関心はあっても、その関心が必要に迫られたものではないときには、「へーそうか」と思っておしまいでしょう。あるいは、「身勝手」な人はどこにでもいるものだし、そういう部類の人と直接付き合いなけれ

ばならない人は、さぞかし大変だろうな、などといって話を切り上げるかもしれません。性格をめぐる人のこうした振る舞いには何もとりたてて詮索すべきことはないようにも思われます。

ですが、ここでよく考えてみたいことがあります。それは、「身勝手」な人はどこにでもいるものだ、といった類いの物言いがもつ、ニュアンス、というか、雰囲気についてです。実際、「身勝手」な人はどこにでもいるということになれば、いつ自分に災難がふりかかってくるかわかりませんし、いつ自分自身が「身勝手」になって、知らぬ間に災難の種になってしまうとも限りません。ですから、そういうことが本当なら、たぶん本当だと思いますが、それこそ一大事、というか、厄介な現実であるわけです。ところが、「身勝手」な人はどこにでもいるものだ、そういう部類の人と付き合うのは大変だ、といった言い草には、何か諦めにも似た、受容というか、甘受というか、そういった態度が隠れているように感じられないでしょうか。もっとはっきりいうと、ちょっと変に聞こえるかもしれませんが、「身勝手」な人種はそれはそれで社会に受け入れられてしまっているというか、もちろんその程度にもよるわけですが、あまり大きな声ではいえませんが、社会はしぶしぶそういう性格の人たちを受け入れているというか、何か面倒なことが直接自分にふりかかってくればともかく、そうでないときは、つまり遠巻きに見ているときは、社会は苦々しく思いながらもそれなりに平然としているのではないのでしょうか。さわらぬ神にたたりなし、事が起れば神はもはや神にあらず、とでもいうべき、こうした遠巻きな、諦めにも似た、とりあえずの静観、は何を意味するのでしょうか。

ベルクソンの性格論を考えると、まずはこうした事実がベルクソンの注意を引いているのだ、といって間違いないと思います。では一体、性格とは何なのでしょう。ベルクソンは例えばこんな意味のことをいっています。性格を表す言葉というのは様々だけれども、性格を表す言葉が発せられるときには、どの言葉も、言葉が本来もつ性格を甘んじて受け入れているように見える。性格を形容する言葉というものは、たいていは、一般名詞や形容詞からなっている。「気弱」にしても「剛毅」にしても、そうした言葉である。つまりこうした言葉は本来「気弱」な性質とか「剛毅」という性質を一般的に表現するもので、そうした性質をもっている人には誰にでも適用できるようになっている。そうであるからこそ言葉として機能できる。そうであるからこそ言葉として機能できる、そのような言葉であることに、性格を表す言葉は甘んじている、ということです。

ベルクソン自身が挙げている例でこのことをもっと詳しく説明しましょう。例えば

モリエールという喜劇作家がいます。ベルクソンはモリエールの芝居をたくさん見ていたようですが、そのモリエールの例を引いて、彼が芝居につけるタイトルのことを問題にしています。モリエールが『守銭奴』という芝居を書いています。彼が自分の芝居にどういうつもりで「守銭奴」というタイトルをつけたのか。ベルクソンの考えでは、モリエールはどこそこの特定の「守銭奴」のことを気にかけていたのではないので、「守銭奴」一般が、世の中にいる、ありとあらゆる「守銭奴」の生態が気になっていたのだ、そしてそのようなつもりで「守銭奴」という言葉を使っているのだ、というのです。その際、ベルクソンはこんな意味のこともいっています。モリエールのような作家の芝居にあっては、登場人物は確かに様々な名前をもった人物たちなのだけれども、本当の主人公は実は「性格」というものなのであって、「性格」が舞台をかけずりまわって、人をぎくしゃくさせ、人と人のやりとりをぎくしゃくさせ、世の中をぎくしゃくさせている、そういうのがモリエールの芝居なのだ、というのです。

つまり、「性格」を表す、例えば「優柔不断」というような言葉は、れっきとした一般名詞として使われていて、あるいは一般名詞であることに甘んじていて、この言葉が表しているものは、ある意味では凡庸だが、場合によってはひそかに世の中の真の主人公になれるようなもの、ときには様々な事件や災難を引き起こしてしまう点で、ちょっと得体の知れないものだが、さりとて通常は社会からは静観され、モリエールのような作家からは喜劇の題材やタイトルにされてしまうことがありうるような何かなのです。

では、そうした性格の正体は一体何なのでしょう。ベルクソンがよくよく考えて出した結論は次のようなものです。すなわち、性格とはこわばりである。どういうことでしょうか。こうした物言いは、わかりやすそうでわかりにくい、直感に訴えるようでいて、とりとめがない感じがしますから、少し説明してみます。まず、性格がこわばりである、という場合の、こわばり、とは何がこわばっているのか、ということを考えてみましょう。性格がこわばりという存在の仕方を意味するなら、それは何かがこわばってしまったものであるに違いありません。何がこわばってしまったのでしょうか。そこでこわばっているのは、生きる力だ、というのがベルクソンの考えです。

しかし、これでもまだ漠然としているかもしれません。というのも、こんな疑問が生ずるからです。生きる力がこわばったものが性格だとして、世の中に性格というものをもたない人は果たしているだろうか。そんなことはない、と皆さんはお感じになるでしょう。誰も性格というものをもってこの世の中を生きている。それが真実だ、とお感じになるでしょう。では、性格とはこわばりである、とはどういうことか。こ

のことを正確に理解するには、ベルクソンにもう少し耳を傾けてみる必要があります。すると、ベルクソンがこんな言葉を述べているのが聞こえてきます。すなわち、こわばりとは無意識である、あるいはほとんど無意識である。するとどうなるか。こわばりは知らずにこわばっている、そうとは知らずにこわばっている、こわばりとしての性格とは、そうとは知らずに、自分を意識せずに、自分のことに気づかずに自らが一個の性格となっている、ということです。ここまでの話をまとめるとこうなるでしょうか。性格とは、私たちの生きる力の、イメージでいえば、何かこわばってしまったもので、私たちの生きる力のうちの、何か無意識的な、惰性にも似た何か、惰性であるからこそ闇雲に衝突したりしますが、衝突事故を傍で見ている人はただ静観しているほかないような何か、そしてとどのつまりは一般名詞で表現されるのが適当な何か、と。もしこうした考えが正しいとすると、性格というのは何だか困ったものに見えてこないでしょうか。実際、私たちは自分の性格にてこずることが多々あるのではないか。

確かに私たちは自分の性格にてこずってしまうことがあります。なかには自分の性格が大好きだ、という人もいるでしょうが、そういう方は自分のかわりに他人をてこずらせていないかどうか、よく考えてみたほうがよいでしょう。それはともかく、私たちが例えばモリエールのような作家の作品に登場する人物を笑うのは、私たちの性格に関する実感が背景となって、登場人物たちが彼らの性格によっててこずらされ、彼らの性格によって他の登場人物たちをてこずらせ、結局は社会をてこずらせている様をまのあたりにするからではないでしょうか。私たちが登場人物たちの仕草や言葉や挙動に笑いをこらえることができないとすれば、それは私たち自身のうちに、どうしようもなく、笑いの種になるようなものが、巣くってしまっているからではないか。つまり、私たちは、つねに、舞台上の人物たちそっくりになってしまっていて、他人から笑われてしまってもやむをえないような何かを、自分自身のうちに抱えているからではないか。喜劇の笑いに若干の苦みが含まれているのはこういう理由によるのでしょうか。

そこで、次は、性格というものが笑いの対象になることがある、という観点から、性格について考察してみましょう。私たちは性格に色濃く染められた他人の言動を見て笑うことがありますし、性格に染められた言動が私たち自身のものであるときには、私たちは他人から笑われてしまうことがあります。性格を笑う、あるいは性格が笑われる、そういうとき、笑うことで私たちは性格に対して何をしているのか、あるいは笑われることで性格は何を被っているのか。それは一種の懲罰だ、とベルクソンはい

っています。懲らしめですね。では、どうして笑うことが懲らしめになるのでしょうか。性格は惰性に類する、無意識的な何かでした。ですから、笑うということは、惰性の運動に、一瞬、我が身を振り返らせることなのではないでしょうか。笑いは無意識としての眠りこけている性格を、一瞬だけ目覚まそう、ほんの一時でも起こそうとしている、と見ることもできます。もし一時でも性格が我が身を振り返ることになれば、惰性の運動は一時中断されることになります。性格がいわばほんの一時行く手を阻まれることになるわけです。ですから、それは一種の懲らしめなのです。では、どうして性格は、笑われたとき、ほんの一瞬でも目を覚ますことができるのでしょうか。つまり、どうして懲らしめが効くのでしょうか。性格はそのどこかに、いつも、目覚めの可能性を宿しているからではないか。性格はそのどこかに、笑われると意識が戻り、それ自身のうちに、盲目の走行を続ける性格という車の車輪を脱輪させうる力を秘めているのではないか。とすれば、性格はときに私たちをひどくてこずらせることがあるけれど、総じて私たちが何とか付き合っていける何かだ、ということになりそうです。ちょっとは安心されましたか。

最後に、性格が目覚めているときには、私たちはどのように行為しているのか、という問題を考えておきましょう。そのとき性格がそれまで示していた盲目の運動はどうなるのでしょうか。ベルクソンがこの問題を考える際には、極限の事例に訴えています。極限の事例に訴えることで、その解答を示唆しているところがあります。ベルクソンの考えでは、性格が強烈に目覚めているとき、そのようなときは稀で、そういう意味では極限事例なのではありますが、ともかくも性格が強烈に目覚めているとき、性格はもはや惰性運動の軌道を描かなくなります。惰性の名残はあるかもしれませんが、あちこちで軌道は乱され、予測し難くなります。また、たとえ見たところは同じ軌道に沿って進むとしても、もはや同じ運動には見えなくなってきました。別の雰囲気にも包まれる、とっていいかもしれません。あるいは、やわらかなもの、柔軟なもの、生き生きと表情を変え、しなやかに波打つもの、というニュアンスを帯びてくる、とっていいかもしれません。そして、強く激しい性格とはある意味では深く広やかな眠りのことだとすれば、強烈な性格が強烈に目覚めるとき、そしてそれが明確に行動するとき、その行動は、固有名をタイトルとしてもつ悲劇の題材となる、つまりオディブースやハムレットになる、というのが、ベルクソンの考えです。

来週は生物の死について考えます。

## 第4回

### 生物の死について

今日は生物の死について考えてみます。

生きているものはみないつかは死ぬ、といわれます。古来、哲学者たちはその死と  
いうことをめぐって様々なことを述べてきています。

ベルクソンは生物の死ということについて、生きているものがみな死ぬということ  
について、どのように考えていたのでしょうか。『創造的進化』のあちこちから、生  
物の死の問題に通じているような、彼の片言隻句を取り上げて、あれこれと考えてみ  
たいと思います。一見、生物の死の問題とは何の関係もないように見える話が出てき  
ますが、これから取り上げる話題は、ベルクソンのうちでは、今日のテーマに深く関  
連しているものです。『創造的進化』は岩波文庫で読めますから、皆さんも機会があ  
ったら直接ご覧になってみて下さい。

まず初めに老化現象について考えてみます。老いること、年寄ることですね。老化  
というのは、若くて元気なときには、ふつうはあまり気にとめないものですが、ある  
一定の年齢を越すと、初めはおぼろげに、だんだん明瞭に感じられるものとなってい  
くようです。その老化ということについて、とりわけ老化の原因ということについて  
は、今日でも生物学者たちが、色々な手法を駆使して研究していますが、ベルクソン  
も実はこの問題にぶつかっていました。ただし、ベルクソンがこの問題にぶつかった  
のは、生物の死とは何かという問題を考えていたときというより、生命とは何か、命  
とは何か、生きていることとはどういうことか、という問題を考えている途上ででし  
た。どうしてそんなことになったのでしょうか。

ベルクソンによると、生き物が生きている状態というのは、どんなに安定して見え  
る状態でも、絶えず体のなかや体の表面で何か変化しつつあります。また、変化が  
大きく目に見えるものとしては、生物の「発達」とか「成長」の過程があります。例  
えば、幼年期から思春期を経て青年期に移行する際の変化には目を見張るものがあり  
ますね。この発達や成長を促す推進力は、たぶん皆さんがまだお母さんのおなかのな  
かで胎児だったころの、おなかのなかでぐんぐん発達していったときの、その成長力  
の延長線上にあるのだと思います。ベルクソンはこの点について「胚の発達と完全な  
有機体の発達とは切れ目のない連続をなしている」と述べています。

この成長力はいつごろ止むのでしょうか。例えば、私は高校二年生の頃に身長が急  
激に伸びて、それ以降はもう伸びていません。その昔、25才はお肌の曲がり角という

フレーズが出てくるコマーシャルがありました。ヒトの生物としての成長力の曲がり角は25才よりもっと早い時期に訪れるようです。まあそれでも、男盛りとか女盛りという言葉がありますし、働き盛りというような言葉もありますから、人間の社会の時計では、老いが意識されるようになるのは、生物としての成長力が曲がり角を迎えたあとの、25才よりも、ずっとあとのことです。それはそうなのですが、これは見方を変えれば、人間社会の一員として老いを意識し始めるころには、生物としてはもう決定的に深刻に老化の過程が進んでしまっている、ということでもあります。生物としての成長がいつまで続いて、いつから老化が始まるのか、ということは、さしあたり、問題ではありません。ベルクソンが関心を抱いていたのは、そういう種類の事実問題ではありません。そうではなくて、一見何の変哲もない、もっと基本的な事実です。それは、成長を特徴づけるような体内や体表面の変化というものがあるだろうし、老化を特徴づけるような身体的、生理学的変化が確かにあるだろうけれども、それでも老化過程は成長過程に切れ目なく続いてやってくる、という事実です。先ほど、発達や成長の推進力という言い方をしましたが、その推進力は切れ目なく老化を推し進める力ともなっていて、ということです。老化は衰えることだから、衰えの推進力という言い方は少し変に聞こえるかもしれませんが、ベルクソンは文字通りそういう表現を使っています。例えばこんな具合です。「生物を成長させ、発達させ、老化させる推進力は、とりもなおさず、その生物に胚生活の諸相を経過させた力なのである」。受精卵を分裂させる力が、とりもなおさず、生物を成長させる力であり、生物を成長させる力が、とりもなおさず、老化を推し進める力なのだ、というわけです。

ここでもう少し想像をふくらませてみましょう。老化の先に確実にあるのは死です。老化過程の終点が死ぬことだといってもいいでしょう。すると、生物を成長させる力が、そのまま、生物を死なせる力になるといってもいいかもしれません。今度は、反対方向に想像をふくらませてみましょう。私たちは胎児である以前には受精卵です。では、受精卵の分裂力はどこから来るのでしょうか。それを考えるには、受精卵以前には何があるのかを考えてみなければなりません。すると、卵子と精子が見えてきます。それらはどこから来ますか。父親と母親です。では、父親と母親は。父親と母親にはそれぞれその父親と母親がいます。だから、あとは果てしない話になります。すると、生物としての私を老いさせ、死なせる力は、元はといえば、その果てしなく、どこまでも続く物語を、現在に向かって織り上げてきた力から受け継がれた力ということになります。

もっと想像を働かせてみましょう。遠い過去から果てしなく続いてきた物語を紡ぎ

出してきた力は、一体どこから来たのでしょうか。これは生物の起源にかかわる問題です。ベルクソンの考えでは、生物をこの世界にもたらした力は、この世界をもたらしただけの力でもありません。生物を生み出した力と同一起源の力から物質の世界が生まれてきたというのです。生物を生み出した力と物質の世界を生み出した力がどうして同一起源のものといえるのか、また具体的にどのような仕方で物質世界が生まれてきたか、については、いまは詳しく考察する余裕がありません。いまはとにかく、ベルクソンはいくつかの理由から、生物を生み出した力と同じ起源の力から物質の世界が生まれたと考えている、ということだけ述べておきます。さて、この世界が大まかには物質界と生物界に分けられるとすると、この二つの界をあわせたものがこの世界ということになります。すると、ベルクソンの考えに従えば、同じ起源の力からこの世界が生み出され、同じ起源の力によってこの世界が存在させられている、ということになります。とすれば、遠い過去から生物の物語を連綿と紡ぎ出してきた力、皆さんのお父さんやお母さんを生み出し、皆さんを生み出した力は、この世界を生み出した力でもある、ということになります。その力が皆さんの老化を刻一刻と推し進めているのだとすれば、世界を存在させる力が、とりもなおさず、皆さんに長い老化の過程を経過させ、ついには皆さんを死に至らしめるということになります。世界を存在させ、私を存在させている力が、私から存在を奪うわけです。私がいくらもっと生きたいと思っても、命は奪われるときには奪われるのです。

では、私は私の死をもって、私が受け継いだ力を使い果たしてしまうのでしょうか。確かに老化する私はそれを使い果たしてしまうように見えます。私はそれを元も子もなく使い果たしてしまうのでしょうか。そうではないようです。例えば、樹木の中心部が朽ち果て、空洞化してしまっても、その新芽は若々しく見えますし、その新芽を若い樹に接ぎ木すれば、新しい樹になります。それと同じで、私がいくら老いても、私の体にはいわば接ぎ木が可能な新芽の部分があって、それが接ぎ木されるのを待ち受けています。男性と女性では生殖行為が可能な年齢の上限はかなりずれていますが、健康体であれば、一生のあいだのかなり長い期間、その行為が可能で、新芽は接ぎ木されると新しい樹になり、その新芽も接ぎ木されると、新しい樹になる。皆さんの場合も同じなわけです。私が樹なら、その新芽も私であるはずで、あるいは少なくとも私の一部であるはずで、確かに、接ぎ木するかどうかは私の自由です。ですから、人類はその新芽の部分を互いのあいだで一切接ぎ木しないという選択も可能です。あるいはベルクソンの言い方では、人類には種をまくだけで、それが実らないようにすることも可能です。ベルクソンによれば、その点で人類は生物界の異端児、あるいは

は生物界が予期しなかった行為を仕出かしてしまう種なのですが、この点についてはいまは脇にのけておきましょう。この種の問題をめぐる今日の状況はベルクソンの時代とは異なっています。地球上の人口が今後どこまで増え続けてゆくのか、増え続けていった先に何が待ちかまえているのか、増え続けていくと仮定するとき、私たちにはどのような選択が可能なのか、といった問題についても、いまは脇にのけておきましょう。いまは増え続けてゆくという仮定を可能にする生物学的な背景のほうが問題です。つまり、未来に向かって開かれているかもしれない果てしない生物の物語という背景です。皆さんから皆さんの存在を奪う力は、皆さんの存在の一部を通して、皆さんとは別の存在へと生き続けていきそうなのです。そのような仕方生き続けていきそうなのが、皆さんから、皆さんの存在を奪いとるわけです。

さて、ここまでベルクソンにできるだけ沿う形で考えてきたわけですが、皆さんはここまでの話を聞かれてどう思われたでしょうか。私には一つの光景が目には浮かんできます。それはどこまで拡がっているのかよく解らない命の連続が、死という、無数の、とても小さな支柱によって支えられている、といった光景です。あるいはこんなイメージが浮かんできます。皆さんは水きりという遊びをご存じでしょうか。平たい小石を水面すれすれに投げると、小石は細かく何度かはずみます。その数の多さを競うのが水きり遊びです。ベルクソンには、平たい小石が何度かではなく、果てしなく水面をはずんでゆくような光景が見えていたのではないのでしょうか。小石の一瞬の着水が死です。その一瞬の、無数の死に支えられて、小石である生命は水面すれすれを数限りなくはずんでゆくのです。本物の小石であれば、着水するごとに、はずむ力が衰えてゆくのですが、生命という小石は、ベルクソンの目には、いまのところいささかも衰えを見せていないものと映っているようです。ベルクソンの目にどうしてそう見えるのか、その理由を知りたい方は、どうぞ『創造的進化』をお読みになって下さい。とにかく、いまのところいささかも衰えを見せていない、どこまでもはずんでゆきそうなの、そのつどの着水、静かな水面とのほんの一瞬の接触、それが生物の死なのだ、というのがベルクソンの結論です。

最後に、この結論がベルクソンにとって最終的な結論なのかどうか、という点について考えておきたいと思います。果てしなく続く水きりの光景の一部としての死という考えは、生物の死についての一つの考え方です。いまかりにこの考え方が正しいと仮定したとしても、これはやはり一つの光景にすぎないのではないのでしょうか。いまかりに私たちが山歩きをしてきたのだと想像すると、私たちにいま見えている光景は、私たちが歩みをもっと進めて、もっと高いところにまで達すれば、もっと大きな光景

の一部と見えてくるかもしれないのです。もしもっと大きな光景が開けてくれば、それまで見えていたもののニュアンスや意味合いが変化するということは大いに予想されます。それは例えば、水きりの光景のうちに、第二回で問題にした自由行為や第三回で問題にした性格をおいてみるのと同じです。自由な行為や性格というものを今日見えてきた光景のうちにおいてみれば、それらが新しい光で照らし出されてくるように見えます。それと同じことで、水きりの光景ももっと大きな光景のうちに現れてくれば、新しい光の下に新しいニュアンスを帯びて現れてくる可能性があるのです。少なくとも、『創造的進化』を書き上げたベルクソンにとっては、水きりの光景は、死についての、従ってまた生命についての、最終的な光景ではない、という予感が働いていたようです。

## 第5回 内なる他者

最終回の今日は内なる他者と題してお話させていただきます。

例えば、皆さんが、ロビンソン・クルーソーのように、一人孤島に漂着してしまい、いっしょに流れ着いたわずかな資材だけが頼りの生活を余儀なくされているとします。そのような場合に皆さんが最初にすることは何でしょうか。初めは何をするでもなく、あるいは何もできずに、ただ呆然自失の状態に陥っているかもしれません。しかし、だんだんそうもしていられないという気持ちになってくるでしょう。だいたいおなか为空いてくるでしょうし、疲れて横になれる場所が必要になってくるでしょうから。従って、怪我もしていず、体がどこもおかしくなければ、まず最初に積極的に行うのは、食べるものの確保と、ねぐらの確保でしょう。島中を歩き回り、捜し回って、食べるものも何とかなった、雨露をしのげ、安心して寝られる場所も見つけられたとします。次は何をするでしょう。今日のような時代では、船が難破したとなれば、ただちに救助隊や捜索隊が出動しますし、安否が確認されるまでは、徹底的に捜索活動が続けられますから、何年間も孤島で一人暮らしをするなどというのは、現実にはありえないことでしょう。つまり、現在では、偶然に、自分の意志とは無関係に、ロビンソン・クルーソーになってしまうことは、何者かに拉致されて孤島にほうり出されてしまうことでもない限り、ほとんどありえないことだと思われまます。ロビンソン・クルーソーが不可能な時代、というのはおもしろい問題ですが、いまはこの点について考えるのはやめておきます。話を元に戻します。安心して過ごせる場所も、食べ物も、

何とか確保することができました。誰かが自分を助けにやってくる見込みは、まずなく、自力で孤島から脱出できる見込みもない。そんなとき、皆さんだったら何をやるのでしょうか。ここから先は、皆さんの性格や特技や身体能力に応じて、様々でしょう。例えば、私であれば、私は釣りが好きなので、状況がそれを許せば、釣り道具をつけて魚をとることに専念するかもしれません。毎日、適度に、食べ物が確保できるとは限りませんから、とれるときにはとっておこうと考えると思うのです。もちろん、とれすぎた魚は保存しなければなりませんから、保存に必要な加工処理を施す術もあみださなければなりません。私だったら、こうしたことに何日も費やして、時を過ごすかもしれません。皆さんも、皆さんがどんなことをして過ごすかを想像してみてください。そして、絶海の孤島で、独りぼっちで、皆さんにできること、皆さんがしたいこと、のすべてを、一通りやり終えることができた、細かいことでまだやり残していることはたくさんありますが、あとは改良の問題で、徐々に手をつけるしかない、という段階に達したとします。生活はそれなりにではありますが、だんだんと落ち着いてくるのが感じられるでしょう。そんな段階に達すると、皆さんは、自然に、皆さんのことを心配しているに違いない、皆さんのご家族のことや友達のことを、あらためて、思い出すのではないのでしょうか。家族や友人のことを思い出すだけでなく、彼らと心のなかで会話さえ始めるかもしれません。それだけではたりなくて、いっしょに流れ着いた道具箱のなかに入っていた日記に、自分の思いや内心の会話を書きつけてみようという気になるかもしれません。また、皆さんに絵心があったら、ひっとしたら家族の肖像を描き始めるかもしれません。

ところで、いま皆さんの心のなかに現れてきて、皆さんと会話したり、その会話の言葉を皆さんが日記にしるしたり、その姿を皆さんが絵に描いたりするように促してくる、皆さんの家族や友人は、いつ皆さんの心のなかに現れたのでしょうか。あるいはいつから皆さんのそばに、といっても目に見える「そば」、ではありませんが、皆さんのそばにいますのでしょうか。現実の家族や友人は遠い祖国にいます。ですから、皆さんの心のなかに現れる家族や友人は、皆さんの心のなかに住んでいる家族であり友人です。そうした心のなかの家族や友人はいつから皆さんの心のなかにいるのでしょうか。ひっとすると、皆さんが忙しく立ち働いていたときにも、すでに、皆さんには彼らの姿が漠然とはあれ感じられていたかもしれません。どんなに忙しくしていても、皆さんの心の片隅に彼らは見えていたかもしれません。あるいは、姿は見えなくとも、その存在が感じられていたのかもしれません。では、皆さんが露ほども家族や友人のことを思い出していなかったとき、そのようなときには、皆さんの心のなか

にいま現れてきている家族や友人は、皆さんの心のどこにもいなかったのでしょうか。そんなことはないとお感じになるのではないのでしょうか。家族や友人に限らず、皆さんが思い出そうとすればすぐに思い出せる人達、ふと思い出してしまう人達、何かあると自然に思い出してしまう人達、そのなかには大好きな人もさほど好きでない人もいるでしょうし、ひっとしたら嫌いな人も含まれているかもしれませんが、そうした人達は、実は、いつも皆さんのそばにいる人達、そばといっても目に見えない「そば」ですが、そのようなそばにいる人達なのではないのでしょうか。

では、目に見えなくとも皆さんのそばにいつもいる人達、そうした人達は、皆さんに対してどんな振る舞いをするのでしょうか。現実目の前に現れる他人たちとほとんど同じ振る舞いをするのではないのでしょうか。皆さんのことを心配したり、激励したり、しかったり、悲しんだり、喜んだりするのではないのでしょうか。皆さんが何かしようとするとき、ソクラテスのダイモーンのように、皆さんを差し止めることもあるでしょう。ソクラテスのダイモーンはしませんでした、皆さんを後押しすることもあるでしょう。そう考えると、またこうした点だけを取り上げてみますと、皆さんの心のなかの他人たちは、現実の他人たちと、とても似ていることが分かります。

いまかりに、このような他人たちを「内なる他者」という名前で呼んでみることにします。そして、その「内なる他者」とはどんな人たちのことかを考えてみます。先ほどの孤島での生活の場面では、皆さんの家族や友人が「内なる他者」でありました。では、皆さんの「内なる他者」は家族や友人に限られるのでしょうか。そんなことはないと思います。例えば、皆さんのうちには、皆さんの恩師、同僚や先輩や後輩、いつか大変世話になった方々、知人程度だけど、かつて一緒に仕事をしたり、飲んだりしたことがある人達、よく飲みに行った飲み屋のおやじやおかみさんも、姿を現すでしょう。そればかりではありません。いま挙げたのはいまこの世に皆さんといっしょに生きている人達ですが、もうこの世にすでにいない人達、故人たちで、その生前を皆さんがよく知っていた人達も姿を現すでしょう。

では、例えば孤島で一人きりの皆さんの心のうちに現れてくるのは、多かれ少なかれ皆さんが直接知っている人達に限られるのでしょうか。そうではないように思われます。皆さんが例えば本を通じてのみ知っているような人達、文学書や科学書や哲学書を通じて知っている人達が現れてくることのあるのではないのでしょうか。それらの本の作者たちは、皆さんが、それらの本に日頃親しんでいる度合に応じて、皆さんに親しい人達になっているのではないのでしょうか。それだけではありません。歴史書や伝記の登場人物としてのみ知っている遠い昔の人達も皆さんのうちに現れてくるかもし

れません。つまり、皆さんが一度も会ったことがないばかりか、その人自身が書き残したのや作ったものが何もない人、つまりその人について間接的にしか知りえないような人達も現れてくるかもしれません。例えば、日頃聖書に親しんでおられる方々にとっては、イエスやその周囲にいた人達であるかもしれませんし、論語に親しんでおられる方々にとっては、孔子とその弟子たちであるでしょう。また、日頃日本の歴史書に親しんでおられる方々には、日本の歴史に名を残した大人物たちであるかもしれません。

もうこれくらいで「内なる他者」になる可能性のある人達は出揃ったでしょうか。実はまだあります。例えば、皆さんには好きな小説や物語があるかもしれません。そして、小説や物語に出てくる架空の登場人物に対して、皆さんが魅力や共感を感じている場合もあるかと思います。例えば、私はトーマス・マンの『魔の山』という小説が好きで、この小説を何度も読んでいるうちに、ハンス・カストルプという人物がとても身近な存在に感じられるようになりました。しかし、そのような仕方では皆さんのうちに住むようになるのは、何も私にとってのハンス・カストルプのような、皆さんにとっても身近に感じられる人物に限られるわけではありません。崇高な人物、憧れの対象であるような人物、手本としたいと心底思えるような人物、とてもその人の中にはなれないけれども、自分を映す鏡となるような人物、そのような人達である場合もあると思います。

もうこれでお仕舞いでしょうか。実はまだあります。皆さんは、自分はこうなりたい、こうありたい、と思えるような、自分の理想の姿を思い浮かべることがあるかもしれません。そのような自分はそのときに他人の姿とダブっている場合もありますが、純粹に自分の姿で現れる場合もあると思います。それがいま非常に明瞭な像を結んでいる場合を考えてみますと、その場合の自分の姿は、ここまで問題にしてきた「内なる他者」たちとどこが、どう違うのでしょうか。おそらく細かく見てゆくといろいろな違いが出てきそうですが、共通点もたくさんあります。この問題を考えるには、例えば、元気をなくしている自分にとっての、とても元気だったときの自分とか、冷静さを失っている自分にとっての、冷静だったときの自分とか、緊張しきっている自分にとっての、リラックスしていたときの自分というものを考えてみるのがよいと思います。また、例えば、怠け癖がついてしまった人が、とても勤勉で頑張り屋だったときの自分を思い出して、現在の自分を嘆いたり、物事に感じ入ることがなくなってきた人が、感受性が鋭かったときの自分を思い出して、現在の自分を不本意に思う、といった場合を考えてみて下さい。すると、「内なる他者」は何も他人の姿をしてい

る必要はないという気がしてきます。かつての自分が、あるいは将来の自分が、現在の自分をたしなめたり、激励したり、しょげかえらせたりするわけですから。そして、また、そのようなことをする存在として、皆さんのうちに、姿は見えなくてもいつもいる、皆さんのそばにいつもいるわけですから。

さて、こう考えてきますと、人はたとえ孤島で孤独な生活を強いられるとしても、実はまったくの独りぼっちではないことになります。彼はいまは社会のうちにはいないということは事実です。彼はいま彼が生活を送っていた社会の外ににいるということは事実です。しかし、彼がどんなに遠く社会から離れていても、彼は社会から切り離されてしまっているわけではありません。彼は依然として社会と接触し続けているとさえいえます。というのも、彼が社会の外にいても、彼の心の内にはたくさんの他者が、従ってまたそれらの他者からなる社会が存在し続けているからです。しかも、その社会、彼の内なる社会には、彼が現実に住んでいた社会には存在していなかったような人達もたくさんいます。その意味では、それは彼が現実に知っている社会よりももっと幅と奥行きをもっている社会であるといえるかもしれません。そのような社会が彼の内にいつも存在していて、彼をあるいは見守り、あるいは見張り、あるいは見抜いているのです。ベルクソンは、このような、「内なる他者」の総体としての「内なる社会」が、人間の精神生活や現実の社会生活に対してもつ意味を考えました。そして、この「内なる社会」がなければ、実は人間は一秒たりともまっとうに生きてゆけない、つまりこの現実の社会のうちで生きてゆけないと考えるに至りました。最終回の今日は最後にやっかいな問題を提起しておきたいと思います。第一は、何らかの事情で「内なる他者」の力がとても弱まってしまうことがあるということです。これは人が人であることの一つの基盤がもろくなってしまふことを意味します。第二に、ある人の「内なる他者」は、その人とその人を取り巻く現実の他者との合作のようなものですから、「内なる他者」がある人のうちで、うまく、十分な強さをもったものにまで育たない可能性がいつもあるということです。第三に、たとえ「内なる他者」が形成されたとしても、その「内なる他者」を宿した人が、彼の回りに現実に存在する他者とのあいだで葛藤を起こしてしまう可能性があるということです。「内なる他者」と現実の他者とのあいだの距離は限りなく狭まることもありえますし、限りなく隔たってしまうこともありえます。それらが限りなく隔たってしまうとき、そして、一方が他方を、他方が一方を包み込める関係になくなるとき、つまりは両者が互いに互いを締め出すほかないような関係になるとき、「内なる他者」にとっても、現実の他者にとっても、不幸な事が生じることになります。いずれの問題も由々しき問題ですが、今日の日本

の社会で起こっている様々な問題を考えると、程度の差はあれ、すべていま挙げた三つの問題のどれかに関係しているようにさえ思えてきます。ベルクソンは、問題は正確に提起されると、その解決の仕方が見えてくる、という意味のことを述べています。ですから、私がいま提起した三つの問題も、もしそれらが正しく提起されているとすれば、私は、問題の解決に寄与しうるなにがしかの光が、皆さんのうちに、皆さんの内側から差し込んでくることを、期待してよいかもしれないと考えています。